

唐人伝奇

李 宗 為 著
西 岡 晴 彦 訳

はじめに

唐代伝奇小説の総合的な研究書として李宗為氏の「唐人伝奇」が出版されたのは、一九八八年であり、私とその本と出会ったのは一九八九年留学先のヘルピンのある書店の本棚であった。唐代伝奇研究に関心を寄せている私は、早速この本を買い求めて読み始めた。従来この分野の研究書として、『唐代小説研究・劉開榮著』が中国では唯一のもので、私は既にこの紀要の紙面を借りてその主要部分を翻訳した。

今度、李宗為氏の研究を読んでみると、さまざまな点で、劉氏の研究を凌駕し、新たな成果が付け加わっていることが分かった。

例えば、魯迅の『中国小説史略』（一九三〇）で提起され、ほとんど定説化されている幾つかの重要な問題点が綿密な考証と検討の結果、否定されたり、修正されたりしていることである。

翻訳を終わってみて、実は李氏の提起している問題を、私自身必ずしもすべて納得している訳ではないことに気がついた。そこで本文の翻訳の後に、私の訳注をつけ、問題を深めて行くこととした。著者李宗為氏については、確実な情報を得られないままだが、近年唐代小説に関する幾つかの論文を発表されている気鋭の研究者であ

ることは確かである。

第一章 緒 論

一 「伝奇」という名称の由来、及びその概念の歴史の変遷

明時代の人胡應麟は「伝奇」という名称が、どの時代から始まったのかははっきりしていないが、「唐のいわゆる伝奇は、裴鉉の編集した小説の名前から始まっている。」と言っている。実際、現在までのところ、唐代に、それがある種の小説のジャンルの専称となっていたことを証明する資料は見当たらない。ただ、裴鉉の小説集の名前からとったと考えるか、或は周紹良が『（伝奇）箋証考』で考証しているように、元稹の『鶯鶯伝』の元の名だ、としか言えないのである。その命名の由来は、「奇遇、奇事を述べる」と言う意味だろうと推測される。後代の人々が「伝奇」と同じような作品と考えているものを、唐代の人は志怪などと一緒にして「伝記」とか「記伝」とか「雜伝」などと呼んでいた。例えば、趙麟の『因話録』に「玄宗が道士葉靜能に符を書かせた」話があり、それを、「怪異の「記伝」を誰かが集めたもの」と説明している。ところが、実はこの話は『太平廣記』卷三〇〇に引く戴孚の『広異記』の中にある『葉淨能』という伝奇作品である。また、韋縠の『劉賓客嘉話録』で「伝奇」と称している話が、実は梁時代の吳均の作った志怪

小説集《説奇諧記》中の作品であることなどがその例として挙げられる。宋代の初めのうちは、まだ唐代のこの不統一な呼び方を受け継いでいたが、次第に唐代の伝奇を一つのまとまった形で呼ぶようになった。李昉編の《太平広記》は短編の伝奇文を一つにまとめて、それを《雜伝記》と名づけている。南宋にはいつて、洪邁の《容齋隨筆》では《唐人小説》と呼び、「唐人小説は極めて成熟した、片々たる出来事の中に、知らず知らずのうちに、心の琴線に触れるような頗る艶やかな作品があり、それは唐詩と共に一代の奇と称するに足るものだ」と述べている。この口ぶりからすれば、《唐人小説》が唐代伝奇である事は明らかであり、当時の人は、唐代伝奇の事を、専ら唐人小説と呼んだ事がわかる。ただし、洪邁は《夷堅志癸序》で、《唐代小説》とは、「唐書経籍史に書かれている百余家、六百三十五巻のことだ」と言い、その後、《玄怪録》《異聞集》《談資録》《酉陽雜俎》等十数種の書名を列挙している。そうすると、いわゆる《唐人小説》とは伝奇以外に筆記や雜俎、志怪に及ぶわけであって、伝奇という専門的名称を用いる訳にはいかないのである。事實上、北宋から元代まで、今言う伝奇という小説ジャンルを指す言葉は《雜伝記》であった。元代の辛文房は「雜伝記には鬼神や靈怪について書いたものが多く、哀れ深く人情を描いていて、昔と少しも違わない。しかし描かれている筋はでたらめであるから、ここでは一々取り上げない」と言う。更に、伝奇を《雜伝記》とか《伝記》とか称する現象は代々変わらず、仮に《伝奇》という名前が出来上がった後でも、やはりそのように呼ばれていたのである。湯頭祖の《点校虞初志序》には「《虞初》と言う本は、唐人伝記百十家を網羅したものである」と言っている。しかし、現代の多くの論者は、しばしば論証を加えずに、唐代の人がこの類の小説を、彼らの

時代から既に《伝奇》と称していたし、また、唐代の人がこの名称をもちいて、それ以外の高級な古文と区別し、このジャンルを輕蔑する意味をあらわした。とも言っている。この説は、影響が非常に大きいけれども、実際には何の根拠もない。その来源は、魯迅の《中国小説史略》で述べられている誤解である。魯迅は次のように言っている。「この類の文は当時はあるいは叢集、あるいは単行本だったが、おおよそのものはかなり長く、記述も委曲を尽くし、時にはユーモアも交えていた。そこで論者は、その作品をそり卑しめて《伝奇》と呼び、韓愈や柳宗元などの連中の高級な文章と區別したのである」^⑥

この文章は、具体性を欠き、明確でないので、誤解を招いたのである。魯迅はこの文の根拠として宋の陳師道の《後山詩話》に述べられている文章を挙げる。

「范文正公の《岳陽樓記》は、對話をもちい、情景を描き、世間にもてはやされた。尹師魯がこれを読み、「これは伝奇体にすぎない」と言った。《伝奇》とは裴綯の書いた小説である」

だがこれによって唐代に既に《伝奇》なるジャンル名があったとするのは不正確である。もし唐代に既に《伝奇》が、小説のジャンルの名称となっていて、しかも論者が「そして卑下して用いた蔑称だったとしたら、中唐の元稹や、晩唐の裴綯が、そのような名称を自分の作品に用いたのは何故だろうか？そんなことが起こり得ないのははっきりしているではないか。

また、先に引いた《後山詩話》の例文は、《伝奇》と言う名称が、北宋時代に既に存在した証拠として、いつも持ち出されるが、これも明らかに一つの誤解である。その文中に陳師道は、はっきりと《伝奇》とは、《唐の裴綯の作った小説である》と言っている。つ

まり尹師魯の言う「伝奇体」とは当然裴鉞の「伝奇」のような、「対語を用い、情景をありのままに書く」文体のことであり、韓愈等の提唱した古文とは違っているが、決して小説のジャンルのことを指してはいないのである。

しかし宋時代の人の言っている「小説」家たちの文中には、確実に「伝奇」というジャンルの名称が出て来る。

灌圃耐得翁の《都城記勝》には「説話には四家あって一つは『小説』で、これを『銀字児』と言ひ、烟粉、靈怪、伝奇……、などである」と言ひ、

羅燁の《醉翁談録》には、「小説家には、……靈怪、烟粉、伝奇……などがあり……」と言ひ、

呉自牧の《夢梁録》では「さて、小説で『銀字児』という名前の付いている『烟粉』『靈怪』『伝奇』などというもので……」と言っている。

これらは皆一致していて、ここでは、「伝奇」は小説の八種類の類別の一つに入っているのである。羅燁の《醉翁談録・小説開闢》では、この八種類の「小説」の後に、百七種の小説目録を例示している。これらの例からその類別は、話の内容題材によって区分されていることがわかる。「伝奇」という類別の所にある《鶯鶯伝》等十八種の小説の名前から考え、また今日その内容について推測すれば、それらは皆人間世界の恋愛物語である。

語りの中だけでなく、宋人の説唱諸宮調、傀儡芝居のなかにも、「伝奇」という種類のものがある。《夢梁録》には「説唱諸宮調、昨日汴京で『孔三伝』が上演されたが、伝奇、靈怪を編成して説唱のなかにいれていた」と言う記事がある。ここから考えてみると、宋代の「伝奇」とは、人間世界の恋愛物語の題材をさし、それがど

のような表現形式を採るかは問題にしないのであり、ここから類推すれば、この類の物語を敷衍した小説も戯曲も「伝奇」と称することが出来るのである。

「伝奇」が他の範囲の物語の題材まで含みこんだものの呼び名になって行くのは、ある一定の時間の持続の後に発生した現象である。「伝奇」の範囲は次第に人間世界の恋愛から拡大して、後には烟粉、靈怪、公案など当時の小説、戯曲の題材の総てまでも含みこんだ。この現象は元代にあらわれた。《永樂大典》に保存されている戯文

《宦門子弟錯立身》は錢南揚先生の考証によれば、宋元時代の作品であるが、その中の一つに「娜咤令」があり、その中に「この伝奇は《周勃太尉》である。この伝奇は《崔護覓水》である。この伝奇は《秋胡戲妻》である。この伝奇は《閔大王独赴单刀会》である。」

この伝奇は《馬賤楊妃》である。」等と書かれている。この中の《周勃太尉》は、明らかに世間の恋愛物語ではない。しかし、これが伝奇と呼ばれている。南戯も、雜劇のそのとおりである。鍾嗣成の《錄鬼簿》には、四百五十種の元雜劇の名前が記されているが、書中には雜劇の二字は全くなく「伝奇」と概括して呼んでいる。やや下って、楊維貞の《元官詞》に「屍諫靈公」を伝奇で演ずる」という言葉がある。この《屍諫靈公》というのは鮑天佑の作った雜劇で、《史魚屍諫衛靈公》という作品である。その物語は宋代では、靈怪類に属していた。このように考えて来ると、「伝奇」という言葉は小説の中で、当然その適用範囲を拡大したと見ねばなるまい。果して、鍾嗣成と同時代人の元代の大学者虞集は「唐代の才人は、経学や道学については、見るべき成果を挙げた者が少なく、ただ文辞を飾ることを得意とした。彼らは自由な時間があれば、世にも不思議な男女の奇遇や、人々を恍惚とさせる才知情愛のことを想像し、

それを詩や問答体の文書の形に作り、綴り合わせてまとめた。これを友達同士の集まりで各々行巻とし、お互いに楽しみとした。内容は必ずしも事実でなく、これを「伝奇」と称した。元稹や白居易もこれを作ったから、まして他の連中は推して知るべしである」と言う。

ここから、小説における「伝奇」の範囲が、「世にも不思議な巡り会いや、人々を恍惚とさせる才知情愛」という所まで拡大し、単に人間世界の恋愛だけを指すものではなくなった。と言うことがわかるのである。虞集は、「唐代の人自身が用いていた「伝奇」という呼び名は、恐らく元稹・裴鉞の用いた篇名、書名以外には、唐の記録として根拠とする訳にはいかないだろう。」と言っている。より注意すべきは、いわゆる「伝奇」が小説以外の詩をも指す場合があり、白居易の《長恨歌》をもその中に含んでいることである。即ち「伝奇」という名称は、やはり主に内容、題材をさして言うものであり、決してある種の小説ジャンルを指していたのではなかったのである。

「伝奇」が題材分類の名称となつてから、どうしてその内容を拡大していったか？これは、人間世界での恋愛物語が、人々から歓迎され、その結果、講談や戯曲の中で比重を増していった事とかかわりがあることは明らかである。先にあげた《武林旧事》に「諸宮調伝奇に高郎婦という作品があり……、」とあり、また《金史》に「張仲軻は幼名を牛児といい、町のごろつきだった。伝奇小説に俳優のギャグを交えて語るのを生業としていた」とある。これらの記載から見ると、早くも南宋や金の時代には、南北いずれにも、伝奇類の小説や諸宮調を歌い語る専門の芸人が出現していて、外の種類の小説や諸宮調を演ずる専門の芸人は見当たらなかったという事が

わかる。《醉翁談録・小説開闢》には、「伝奇」類を「靈怪」「烟粉」の後に並べているが、記録されているものの大半は、「伝奇」類に属している。そして、皇都風月主人の《綠窓新話》の「新話」のなかでは、「伝奇」類に属するものが大変多く、その数量は、他の七類の全体を越えている。

私は、この現象はきつと、小説のなかの「伝奇」の題材の比重が拡大し、その影響が次第に高まり、「烟粉」や「靈怪」などの名称が、だんだんと霞んで来て、最後に元代になると完全に姿をくらましてしまい、もともとそれらに属していた各種の物語の筋も一括して「伝奇」と呼ばれるようになってしまったのだと思う。このほか各種の物語はそれぞれ趣を異にしているが、すべて奇（珍しさ）を売り物にしていて、これも、「伝奇」という名称が、他の各種の物語を包括することが出来たのに、他の名称がそうできなかった原因のひとつだと思う。

「伝奇」の内容が次第に拡大して、小説戯曲のもつ題材を包括する程度までになってきたので、今まで題材の類別に使われて来たこの「伝奇」という名称は、だんだんと意味がなくなつて来た。こうして、この名称は題材による類別から次第にある種の文学形式の名称へと変わっていった。実際、鐘嗣成の記述では、この名称は、既に雑劇の名称に用いられているが、このとき、それにふさわしい「雑伝記」という名前にはならず、(伝記は史部に属し、子部小説家類には属さない)結局唐代の人のこの種の小説のジャンル専有の名称と成ってしまったのである。

元末の陶宗儀の《南村輟耕録》には「唐に伝奇があり、宋に戯曲、唱諷(俗語小説)詞説……がある、」という記述があるが、これは幾度も批判されている。明の胡應麟、近代の王国維は共に、これを

間違いと、「彼は唐伝奇を戯曲にしてみました。」と言う。^⑧だが事實は、陶九成は、ここで決して伝奇が戯曲だと言っているのではない。彼の《南村輟耕録》のなかの別の部分で「裨官廃され、伝奇おこり、伝奇おこつて、戯曲繼ぐ」と言っている。即ち、彼の言う「伝奇」とは、正に六朝小説「裨官」の後を継いで興った伝奇小説のことなのである。したがった、「伝奇」が正式に小説のジャンルとなったのは元の後期の事だ、と言うべきである。これは、明代中葉の人胡應麟が、「どの時代からそうなったのか分からない」と言っている状況とも符合している。

胡應麟ははつきりと、小説を志怪、伝奇、雜錄、叢談、弁訂、箴規の六種類に分けた。^⑨これ以後、伝奇は小説ジャンルの名称として広く伝えられた。胡應麟と同時代人の臧懋循は既に唐代伝奇小説を直接「唐人伝奇」と呼んでいる。：「このごろ、無名氏の《仙遊》《夢遊》と言う二冊を読んだ。兩者共に、唐人伝奇から筋を取って敷衍したものである。深みがあるがそれほど堅苦しくなく、ユーモアがあるがそれほど卑俗ではなく、暇人や若い娘の耳に入れば、彼らの心を動かさずにはおかない出来である。これはもとより元人の技量である」とする。しかし、「伝奇」の名称は伝わるうちに、概念が幾度となく変化を遂げたので、後代の文人がこれを用いるときやはりかなり曖昧でまとまりの無い状況であり、伝奇小説の呼称については、依然として統一を欠いていた。明代の人は伝奇小説にたいしても「話本」という総称をもちいていたし、清代には、《紅樓夢》をも「伝奇」と称した人も一人には止まらな^⑩い。

「伝奇」の意味内容の演変の様子から判断すると、我々はそれが後世伝奇小説から明清時代の南戯の専用の名称に転用されて行った理由は、元稹の《鶯鶯伝》の元の篇名に由来するのであり、裴鉞の

書名とは関係が無いことを肯定せねばならない。この名称は、始めは、《鶯鶯伝》のような人間世界の恋愛物語に類するものを指し、総てこの類の題材の小説、説唱、戯曲などまでも「伝奇」と呼ぶようになったのである。後に、その影響が拡大して「伝奇」は次第に「烟粉」や「靈怪」などの名称を併呑し、その内容とする物語の類型も次第に拡大して、元代に至ると、およそ小説、戯曲で用いられている総ての物語の素材が皆「伝奇」に属することとなった。かくて、「伝奇」は、元々の題材分類上の意味内容を失い、雜劇、後には、南戯から伝奇小説に及ぶ専用の名称に変わったのである。

《鶯鶯伝》の原名が《伝奇》だったというこの一つの点について、先に引用した虞集の説からすると、元代にはまだ知られていたのだが、明代になると、もう人から忘れられてしまった。また、明代になると、「伝奇」は、早くも裴鉞の小説集の中の《世にも不思議な巡り会い、人を恍惚とさせる才知と情愛》を包括したのである。したがって、胡應麟は「伝奇」の起源を裴鉞の小説集の名前であろうと推測した。後の人が彼の説を受け継ぎ、殆ど定説化した。もともと極めてはつきりしていた演変の過程が、この説によって乱れてはつきりしなくなったのである。

註

- ① 胡應麟《少室山房筆叢》卷四一《庄岳委談》下。
- ② 《社会科学战线》編集部編《中国古典文学研究論叢》。
- ③ 《唐才子伝》卷十。
- ④ 《中国小説史略》第八編《唐代の伝奇文》。
- ⑤ 銭南揚《永樂大典戲文三種校注》。
- ⑥ 傅惜華《元代雜劇全目》。
- ⑦ 虞集《道園學古錄・写韵軒記》。

- ⑧ 胡應麟《少室山房筆叢》卷四一《庄岳委談》下及び王国維《錄曲余談》。
- ⑨ 《少室山房筆叢》卷二九《九流緒論》。下
- ⑩ 《負苞堂文集》卷三《彈詞小記》。
- ⑪ 葉德均《戲曲小說叢考》下冊《說明代傳奇文七種》。
- ⑫ 張問陶《船山詩草・贈高蘭墅鸚鵡同年》の詩の中に、「艶情人自說紅樓」と言う句があり、その自注に「伝奇紅樓夢の八十回以後は皆蘭墅が補ったもの」とある。また曹雪芹も紅樓夢の最初のところで自作を「伝奇」と言っている。

二 「伝奇」の範囲とその特徴

「伝奇」の範囲と特徴を探る前に、我が国の古代小説のなかで、伝奇を区分する必要があるかどうかについて、ひとまず議論しておかなければならない。よく知られているように「小説」は我が国では一つの古い、歴史的に長く伝えられた名称である。早くも《庄子》の《外物編》に「小説」の二字が出て来る。「小説を飾って以て県令をもとむ、其れ、大達には亦遠し」である。永い歴史の過程のなかで、「小説」の意味内容は、色々とさまがわりして来た。一般的に言えば、小説は、子部と史部との間を行ったり来たりして、その内容は、かなり混乱している。それは「大雅」（正当な文学）に含まれない民間の歴史、野史稗説、雜俎筆記などの総てを含んでいる。これと現代の「小説」の概念との間に、相当大きな違いがあるのは、疑いもない事実である。我が国の小説史の研究に従事する研究者は、一方では現代の小説概念から、その材料を見分け、もう一方では、その古代的な意味内容の変化にも注意を払わざるを得ず、古代近代の小説観念の折衷を試みることになって来るのである。このような状況の下で、魯迅先生は《中国小説史略》を書いた

ので、総ての些かでも物語性をもつ雜俎、叢談の類に至るまで「小説」の範囲に含めて検討を加えねばならなかった。その他の人の書いた小説史もやはりそうなっている。だから、その内容の混乱、その源流が様々あり、そこから起こる複雑さを免れるわけにはいかな

い。

唐人伝奇の起源と六朝志怪は関係がある。しかし伝奇の始まりは志怪だけはなく、独自の源流と変遷がある。そのうえ伝奇が出来た後も、志怪は消えてなくなってしまうのではなく、やはり代わる代わる作り継がれている。だからこの二種類の小説は、内容的に通じ合う所があっても、一種類だとすることはできない。明代の人胡應麟は、小説を六種類に分け、始めに伝奇、次に志怪をおいた。清の人紀昀は「劉敬叔の《異苑》、陶潜の《統搜神記》は小説類である。《飛燕外傳》、《雲真記》は伝記類である。」^①と云う。ここで言う《伝記類》とは、伝奇のことである。明代の人も清代の人も、この二つの小説は区分すべきだと考えていたことが分かる。我々は現在更に一歩進んで、科学的に我が国の古代小説研究を深め、伝奇と言うこの独特な源流と特徴をもち、また、永く流伝して来た小説のジャンルについて、文学史の上からも、また文学評論の角度から見直してみなければならず、必然的にこのジャンルを、錯雑した古小説の中から区分して、一つの専門的に正確な名称を与えることが、より重要になってくるのである。

一部の研究者や編者は、「唐人小説」などと言う錯雑し混乱した名称を、何故使っているのだろうか？私は、現在も伝奇の範囲がはっきりしていないのは、人々の「伝奇」と言う名称についての概念にまだ混乱し、すっきりしていないところがあるからだと思う。この混乱と未整理は、歴史的な根拠がある。それは既に述べたところ

である。

「伝奇」は、本来内容題材上の分類名称で、それが小説戯曲の筋までを包括するまでに発展し、演変して、文学ジャンルの名称になったのである。そこで、当時にあつては、それは、それらの題材の話を敷衍した、小説や戯曲をも指すものとして用いることが出来た。戯曲では、南と北の曲は、形式のうえで明らかに違つていた。そこで、「伝奇」は、次第に南戯を指すのだけ用いられるようになり、北方の雜劇は、伝奇から離脱して行つた、このことはそれなりの理由のある事であつた。しかし小説の方は、こううまくは行かなかつた。何故かと言へば、同じような題材をもつ志怪と伝奇では、その形式上の違いは、南戯と北戯のようにはっきりとした境界をおく訳には行かなかつたからである。このことは、この二つの区別をどうつけるべきかという問題を生み出した。この問題は、現在に至るまで、はっきりとした形では提起され討論されはしなかつたが、実際上は、存在し続けたのである。上述の伝奇小説を「唐人小説」という呼び名で呼ぼうとする現象は、まさにこの問題の反映なのである。志怪と伝奇を区別する問題は、主に小説集の上に現れている。単編の唐人小説は伝奇類に属している。これは、人々に公認されていることである。胡応麟は、伝奇類の下に「飛燕（飛燕外傳）、太真（長恨歌傳）、崔鶯（鶯鶯傳）、霍玉（霍小玉傳）」等4編の恋愛物語を題材とした単編伝奇を例示し、「宣室志」等は志怪に入れている。清の人、章学誠は更にはっきりと指摘する。「小説は稗官から出ている。……唐人には単行の作品があり、特別に「伝奇」と称する一種類があり、一つの事件を結末まで扱い、外には比類できない書物となつてゐる」。日本人の塩谷温は、唐人伝奇を別傳、劍俠、艶情、神怪の四種に分けて、各々の類の下に、総て単行の伝

奇を配列している^④。このような分類法は、うわべは明確なように見えるが、決して問題の根本を解決しているとは言えない。何故ならば、数量のうえでは単行された伝奇を遙かに上回る小説集中の作品を、伝奇類の外に排除してしまつてゐるからである。このような単純な方法は、實際上甚だ不合理と言わざるを得ない。我々はこのような分類法の不合理を、次の一点を指摘するだけで説明することが出来る。いわゆる単行の伝奇と言ふものも、実はもともと唐人伝奇集のなかから取り出して単行されたものが多いのである。胡応麟は、別のところで、次のように言う「唐人伝奇小伝、例えば《柳毅》《陶峴》《紅綫》《虬髯客》のようなものは、叙述が濃密を極め、とても范曄や、李延寿の及ぶところではない^⑤」。ここで、彼に大變誉められてゐる四編の「唐人伝奇小伝」のなかで《柳毅傳》を除いた、他の三編は、皆唐人伝奇集中の作品である。《紅綫》は袁郊の《甘沢謡》の中の作品だし、《虬髯客》は私の考証によれば、裴翊の《伝奇》中の作品である。（第四章第二節参照）明人の《古今説書》《唐人説書》等の叢書に、単行本として収められている作品も、実はもともと唐人伝奇集の中にあつたもので、単行本として出された作品に比べて遙かに多く、数え切れない程なのである。このように見て来ると、我々は唐人小説中には、たくさん伝奇類に属する作品があることを認めねばならない。それらが、必ずしもそれほど典型的な出来栄ではないにしても。

魯迅は《中国小説史略》で、唐人小説集を、はっきりと伝奇の仲間に入れてゐる。第十編《唐の伝奇集及び雜俎》で、まず始めに「伝奇の文を作り、それを集めて小説集を作ること、唐代に多かつた……」と言ひ、その後の叙述の中で《玄怪録》《統玄怪録》《河東記》等等を取り上げ、胡応麟が志怪の中に含めた張説の《宣室

志)も、その中に包括している。第八編で、魯迅は、伝奇の志怪と違うところについて、「叙述は委曲を尽くし、表現は艶麗である」と言う事と、作者が、「意識して小説を作った」事であるとすると、また、郭郢の《高力士外傳》、姚汝能の《安祿山事迹》等の野史雜傳は伝奇とは違ふ、とする。その理由は、これらが、「隠れたところを暴き出し、奇を伝えていない」からである。魯迅は、創作意図と形式的特徴に着目し、単行か否かというような細目にこだわらない。この立場は、間違いなく正確であり、我々に大きな啓発を与えてくれる。しかし、唐人伝奇集は、多量に存在し、魯迅が言及したものは、そのほんの一部分に過ぎない。我々は、当然彼がのべたものの限界を越えて、更に一步の分析を進め、伝奇の志怪と違ふ性質と特徴を掃納し、唐人小説のはっきりした分類を行うべきである。

私は、伝奇と志怪の根本的な区別は、作者の創作意図にあると考へる。志怪小説の創作意図は、結局のところ「神道がでたらめではない事を明らかにする」^⑥に収斂される。したがって、「善と悪とを明らかにし、将来の戒めとし、聞く者に深く心に感服させる」^⑦為のもの、であり、即ち鬼神の实在を述べ、因果応報の実現を証すると言ふことである。そして、伝奇小説の創作意図は、主に作者の文学的才能を世の中に明らかにすることである。それは一面では、自分の名声を拡大し、評判を高める事でもあった。創作意図がこのように違ふので、志怪小説は専ら神秘的なもの、怪奇なもののみ、内容を限定していった。表現上は、簡潔で、質実、書く人の経験や虚構や想像を交えず表現しさえすればよかった。しかし伝奇小説の方は、内容の面では、人の耳を驚かせ、読者に強烈な印象を与える総ての奇談奇事にまで拡大した。表現は、優美で感動的であり、虚

飾を避けず、形容描写に最も注意を払い、作者の叙事能力の適確さ、想像力の珍しさを表すのである。簡単に言えば志怪の創作は主として、宗教活動であり、伝奇の創作は主として審美的な活動なのである。このほか、伝奇には、生み出され、発展した特定の客観的環境から、特別の有る種の特徴が付与されている。それは伝奇に用いられている文体一般が、韓愈、柳宗元の古文から見れば、些か通俗的で、些か華美な文体であり、人物の外形や情景を描く場合に、誇張した駢文をよく使う等々である。

勿論、史伝と志怪から伝奇への発展は、一つの漸進的な過程であり、同時に晩期の伝奇は、また志怪小説と野史別伝に逆戻りする。だから志怪と伝奇をはっきりと区別しようとするのは、特定の具体的な小説集の中でさえ、ある種の困難を伴うのである。この種の小説作品については、我々は、その基本的傾向から、これを判断するより仕方がない。これは実際上一つの普遍的な現象であり、伝奇、志怪に限った事ではない。

註

- ① 《閱微草堂筆記・姑妄聽之》盛時彥跋より引用。
- ② 《少室山房筆叢》卷二九《九流諸論》。
- ③ 《文史通義》内編五《詩話》。
- ④ 《支那文学講話》。
- ⑤ 《少室山房類編》。
- ⑥ 晋干宝《搜神記序》。
- ⑦ 唐唐臨《冥報記序》。

第一章 記注

1 筆者の主張は王夢鷗氏の《唐人小説研究》(一九七二)の《唐伝奇校補考》の四《宋本伝奇と伝奇体考》にも述べられている。

王夢鷗氏は胡應麟の《莊岳委談》をひき、「ここでいわれる伝奇体

とは、裴宣の本のことを指して言っているように見えるが、それは恐らく尹師魯の本意ではなからう。范仲淹の《岳陽樓記》の構成を見れば、その文体は、駢文と散文の互用によっているので、事実を述べるのには散文を用いて、その輪郭を誇張し、景象を言うのには排偶の語を用いて、その細部を描き出すことである」と言っている。(p95)

2 伝奇という名称について、筆者の「それは《黨黨傳》のもとの名前だ」と言う主張は一理あるが、その根拠となっている趙德麟の《辨伝奇》(《黨黨傳》)の記述は、「伝奇」と言う言葉を《黨黨傳》の別名として使っているとは言い切れない。

試みにこの文《辨伝奇黨黨事》で使われている伝奇と言う言葉の用例を検討すると、

- 1 僕按元微之所伝奇黨黨事、在提言十六年春、又言明年生文戦不勝……
- 2 則所謂伝奇者、蓋微之自叙、特假他姓以自避耳。
- 3 正伝奇所謂後歳余、生亦有別娶者也。
- 4 正伝奇所謂鄭氏為異派之従母者也。
- 5 与伝奇所載猶一家説也。
- 6 伝奇言生発其書于所知、予亦其聞説。

《侯鯖録》卷五

ここでは伝奇なる言葉は、《黨黨傳》の別名と言うよりも、

- 1 黨黨の事について伝奇として書いているのは、
- 2 ここで言う伝奇とは、
- 3 ここで伝奇で……というの、
- 4 正に伝奇で言うところの、
- 5 伝奇に載せているのは、
- 6 伝奇で言う生が……したのは、

と言うように、普通名詞的、あるいは動詞的に使っているとみるほうが自然である。だからむしろこの文では、伝奇を小説の一種のジャンル名として使っていると見たい。

《伝奇箋証考》では更に、《商調蝶恋歌》(趙令時)にある「夫伝奇者、唐元稹之所造也」を根拠にしている。この文脈では、確かに、伝奇(《黨黨傳》)とも読めそうだが、これも「伝奇というのは、……の作ったもので」と読んだ方が自然だ。《黨黨傳》が伝奇の別名として使われていることは確かだが、《黨黨傳》が伝奇総てを代表すると言ふ説はすこし、無理がありそうだ。

ただし、伝奇が、裴劔の《伝奇》からはじまったという従来の説は、ほとんど根拠がない。したがって裴劔が自ら軽蔑されているジャンルの名称である「伝奇」を自分の作った書名に用いないだろうという推測は当たって居る。私はむしろ、《黨黨傳》が出るころには、伝奇というジャンル名が、かなり熟して、その代表的なものとして《黨黨傳》をそう呼ぶ習慣が出来たと考えたほうが良からうと思う。